

## 令和3年度 女性活躍推進事業「男女平等推進啓発セミナー」

“気づいていない思い込み”に気づいたら？

—背負いすぎない・押し付けない あなたに潜む「性別役割分担意識」を知る—

私たちの日常には、「男は仕事、女は家庭」などの、性別役割分担の無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）が根強く残っていて、男女平等参画の妨げになっています。このセミナーでは社会全体や職場、また私たち一人一人が無意識に持っている思い込みに気づき、それを乗り越えてより良い生活に向かっていくにはどうしたらよいか、様々な側面から考えていきます。社会学者の山根純佳さん、家庭科教諭の佐藤誠紀さんのご講義のあと、お二人に自由に語り合っていました。

### 講座1

なぜ女性の役割なの？ 育児や介護などのケアと性別役割の思い込みから自由になる

◆講師 実践女子大学准教授 山根純佳さん



プロフィール 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。社会学博士。著書に『産む産まないは女の権利か—フェミニズムとリベラリズム』『なぜ女性はケア労働をするのか—性別分業の再生産を超えて』（共に、勁草書房）ほか。

○山根氏 きょうは、家事・ケアとジェンダーについてお話いたします。

まず、ジェンダーとは社会文化的に作られた性差、自明視している「女らしさ」「男らしさ」のことです。私たちは日常の中で無意識にこのジェンダーに縛られ、ジェンダーを前提とし

た社会制度の中で生きています。そのため 以下の三つの観点からジェンダー平等が訴えられてきました。

一つは、女性が男性と同様の自由や権利を獲得すること。

二つ目に、女性が不利益を被らない社会の仕組みを作っていくこと。

三つ目に、どのジェンダーを生きようとも自由に生きられる、「男らしさ」「女らしさ」を強要されない社会です。

さて、この無意識の偏見アンコンシャス・バイアスの中でも、特に家庭内の家事・子育て・介護を女性がすべき、女性に適している、男性にはできないという考えは根深いです。女性の家事育児時間の長さ、介護離職者数の多さ、時短勤務取得人数の男女差などを見ると、家庭における性別分業が就労における男女間格差ももたらし、そのことは、女性はがキャリアと生涯の賃金を犠牲にすることにつながっています。

女性が離職したり時短勤務を選ぶのは、果たして自発的に選択したことなのでしょうか。育児介護など、生存のために他者に依存せざるを得ない人を支える労働を「ケア労働」と言います。家庭生活は家事とケアによって成り立っていると言えますが、ケア責任を一人で担っている場合、その人（ケアラー）は脆弱な位置に置かれます。ケアという仕事には、自分のニーズや仕事、生活時間よりも相手のニーズを優先せざるを得ない状況が多々あるからです。結果的にケア責任を引き受ける人は、離職や時短を選ばざるを得ないのです。これを克服するには、複数の人でケアを分担できることや社会的なサービスがあること、相談できる場所があることが重要になってきます。

なぜ女性の多くが「ケア労働」をするのでしょうか。

女性は、家庭では「夫が育児休業を取るよりも自分が取った方が家計が助かる」など男女の賃金格差があらわれ、社会では「子育ては母親の責任」などのアンコンシャス・バイアスがあり、さらに「よくケアできること」によって他者から承認される社会の中に生きているという現実があります。

また男性がケアをしないのはなぜなのでしょう。「ケア労働」は男性でもできることですが、男性自身が子育てや介護は女性がやってくれるという意識を持っている限り、ケアの主体にはなり得ないのです。男性に対して育休や産休、看護休暇の取得など、ケアラーとして経験を積む機会を与えることはとても大事です。

ケアをめぐるジェンダー・バイアスを解消するには、学校では男子でも女子でも他者に対してケアできることを評価する、職場では男性にも短時間勤務や看護、介護休暇の利用を推奨するなどのジェンダーの見直しが求められています。家庭では、男女で責任を分有して、どちらもケアの責任の主体になることが当たり前と考える。ケアの責任を男性が持てると

いうことは男性も生活における自立を果たせるということでもなります。これが今後求められている男女平等な社会だと言えると思います。

## 講座 2

大切なことは全部家庭科で習った…はず？ 伝えたい、“暮らすチカラ”と男女平等

◆講師 学校法人桐蔭学園 家庭科教諭 佐藤誠紀さん



プロフィール 桐蔭学園高等学校・中等教育学校家庭科教諭。高校の授業で家庭科に興味を持つ。高校家庭科男女共修の最初の世代。日本ではまだ数少ない男性家庭科教諭として、男女が共に学ぶ家庭科をテーマに据える。

○佐藤氏 私が高校時代の時に、男女共修の家庭科が始まりました。その時から男女が共に学ぶ家庭科という言葉がキーワードとして挙げられていました。

皆さんは家庭科でどんなことを学んだでしょうか。調理、被服裁縫、洗濯……。確かにこれらは重要ですが、家庭科って家事スキルだけを学ぶ教科ではないのです。小中学校では基礎的な生活の自立ということで家事を中心に学びますが、高校ではより良い生活の実現を目指す教科として、三本柱があります。

一本目は家族・保育・高齢者の分野で、ワークライフバランスの話も入ります。

二つ目は衣食住の分野で、調理実習・被服実習のほか、最近では持続可能な社会の実現を考える内容も入ります。

三本目の柱は消費者分野で、来年 4 月に成年年齢が引き下げになりますよね。契約に関する学習などもすごく重要になってきます。

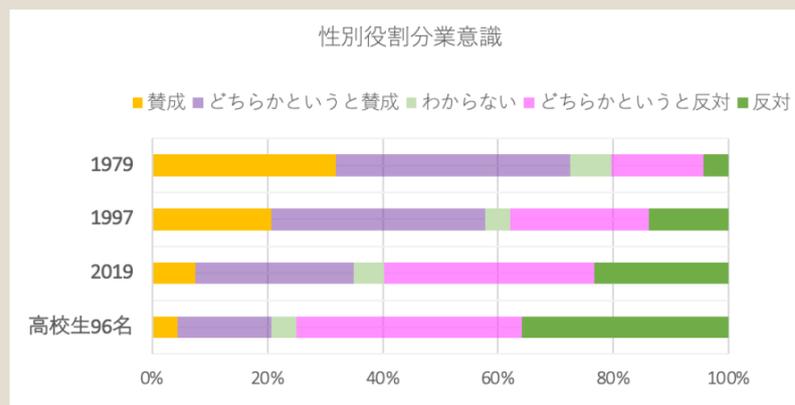
## 2 家庭科のイメージは？ (どんなことを学ぶ教科？)



この三本柱に基づいて、男女が共に学ぶ家庭科の授業をどう進めて、よりよい生活を目指すのかというお話をしていきます。

まずは性別役割分担意識の統計を見ると、1970年代から時代を経るとともに、賛成派が減って反対派が増えている。時代は性別役割分担意識解消に向かっているのかな、と思わせてくれます。

## 3 家庭科の授業



そこで生徒に「パートナーと暮らすとしたら、条件は何ですか？」と聞くと、まずは人柄、これは男女ともに高いです。そのあと女子は経済力、家事育児と続きます。これは性別役割分担意識反対派が多いながらも、稼ぎのいい人に出会えたら仕事は無理しなくてもいいの

かな、と思っているのかもしれませんが。男子が求める項目は、経済力や家事育児はそれほど高くないけれど、容姿と仕事への理解、という項目が若干高い。つまり、仕事には口出しせず可愛い子でいてね、という意識が垣間見えます。こんな理想の相手同士が結婚したら性別役割分担意識バリバリの、昭和的なカップルになるのではないのでしょうか。性別役割分担意識には反対だけど、無意識に性別役割分担意識に沿った暮らしを望む意識が根強く残っているようです。世論調査の未婚の20代・30代も同じような傾向がありますので、家庭科では性別役割分担意識のほかにも仕事や生活の意識を考えていく必要があると思います。

## 女子が求める理想のパートナー



## 男子が求める理想のパートナー



専業主婦世帯が時代とともに減り、共働き世帯が増えている[統計グラフ](#)からは「時代は大きく変わり、君たちが結婚するころには共働きがメジャーになるよ」と話すのですが、頭ではわかっても納得できない生徒もいる。そこで、生徒たちに疑似カップルになってもらい「共働き夫婦が、赤ちゃんとどうやって家事分担をしながら生活していくか」をテーマに、具体的に話し合って家事分担を考えたり、家庭での介護者の比率が女性のほうが多いことについて考えてもらいます。育児や介護の問題を家族の問題として捉え、性別役割分担意識のリスクもワーク・ライフ・バランスを通して考えていく授業です。

要は、男女が共に学ぶ授業を通して「男らしさ」「女らしさ」で構成された家族像や生活スタイルの枠組みについて考えてみようという、まさに「アンコンシャス・バイアスの気づきがある学び」ということですね。男性家庭科教師である私は特に、「男女が共に学ぶ家庭科」を重要なテーマに教えていきたいと思っています。

#### ◆フリートーク

○山根氏 ここからは議論していきましょう。

「家事なんて外注すればいいじゃない？」という時代にもなっていますが、そういう声が上がったら生徒へはどう答えますか？

○佐藤氏 私の学校でも長期の休校でオンライン授業をやったのですが、その時にいわゆる家事労働と職業労働の境界線がぐちゃぐちゃになる経験をしました。おそらく今後、家事と職業労働の境目がすごくあやふやになるのではと感じます。ただ共通点としては、家事も職業労働も、どちらも明日生き残るためにやっている仕事ですよね。外注するとしても、家事は自分たちが生きるための仕事という認識をしていればいいと思います。



○山根氏 家庭科を男女別学ではなく、共学で、男女が共に学ぶことの意義についてどうお考えですか。

○佐藤氏 先ほどの疑似カップルのゲームでは、年収と残業時間もくじ引きで条件を付与します。すると、当然男子だけがいい条件になるはずはなく、女子のほうが高年収のカップルも出てくる。そうすると力関係が逆転するし、低い年収を引いた女子生徒から「私は性別役割分担意識反対なのに」なんて声も聞こえたりします。いろいろなパターンが実践できて、リアリティのある授業ができています。教室でリアルに言葉を発しあうことで感情が乗ってくる。これがいい学びになっていると感じます。

○山根氏 カップルになるゲームでも、自分はどうしたいのかをお互いに言い合って、夫婦が対等にコミュニケーションすることを学ぶのでしょうか。

私はケアというお話をしましたが、子育ても介護も一人ではできないので誰かに“助けて”と言えることがとても大事なのですが、男性が誰かに“助けて”ということはすごく難しいと言われています。この点については学校現場ではどう教育していますか。

○佐藤氏 本当に男子が“助けて”と言えることは今後さらに重要になってくると思います。キーワードとしてあげたいのは「感情」かな、と思います。頭ではわかっていることに、どのように感情を表出して共有するかということが、家庭科の授業ならではと思いますね。その積み重ねで、他人にちゃんと頼ることができるようになるのかなと思います。

○山根氏 最後に、私たちの行動ということですが、現状まだ従来の性別役割分担意識にとらわれている高校生の意識を変えるには、どんなアドバイスが有効でしょうか。

○佐藤氏 家で調理実習をする際に生徒にこんなことを言いました。

「君たちに調理の技術はあるし、冷蔵庫の具材からネットでレシピを検索すれば美味しい料理を作れるはず。ではなぜ今までやらなかったのか。それは家庭で親からそういう生活経験をするチャンスを奪われてきたからじゃないの？ それを自分からつかみに行かないと」。

やらされているという意識ではなく、奪われた機会とチャンスをつかみ取るんだ、という逆転の発想をすれば、もっとポジティブになると思います。

○山根氏 家事やケアを負担として捉えるのではなく、それができることが生活の自立の第一歩であり、それによって生きる力をつけているんだということですね。それは高校生だけでなく、30代、40代、50代の男性にも同じことが言えると思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。